| 都道府県名 | 和　歌　山　県 |
|---|---|

## Ⅰ　学校の概要

| 学　校　名 | 橋本市立隅田小学校 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　　年 | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学　級　数 | ２ | ２ | ２ | ３ | ２ | ２ | ３ | １６ | ２６ |
| 児　童　数 | ７１ | ７０ | ６６ | ８５ | ７９ | ７４ | １０ | ４５５ | |

## Ⅱ　研究の概要

1　研究主題

児童一人ひとりの学びを確かなものにし、意欲を高める学習指導のあり方
ー主として算数科を通して、どの子にも学びの楽しさと意欲をー

2　研究内容と方法

（1）実施学年・教科

○　１～６年　（算数科）

○　「確かな学力」を向上させるためには、児童が学習課題に対して主体的に考え、解決していく意欲を持たせることが必要であると考える。

　本校では、平成１３年度から、全児童に対して学力実態調査を実施し、各教科の授業改善に取り組んできているが、算数科においては特に既習の知識や考え方に定着の差が大きい実態が認められた。系統性の強い算数科において、つまずきの原因や補充的、発展的な指導の在り方を研究し、個々に対応していくことで学習全般における「確かな学力」の定着が図られると考えた。

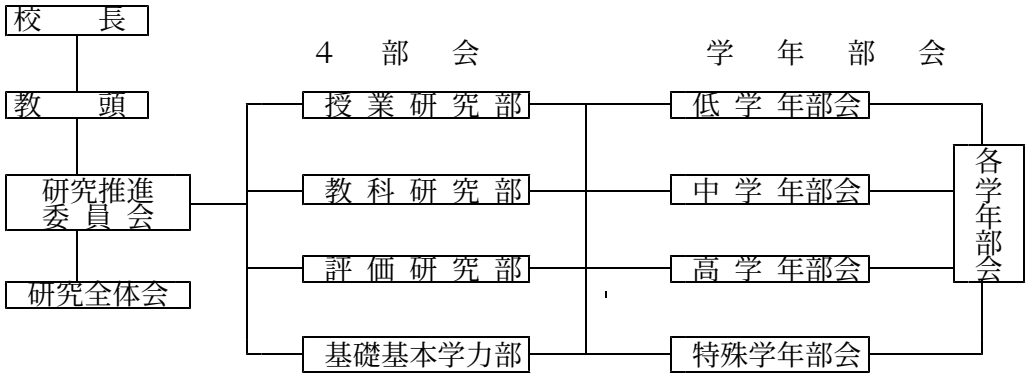
（2）年次ごとの計画

| | |
|---|---|
| 平成15年度 | ○　テーマ<br>　一人ひとりの実態を捉え、補充的・発展的学習を指導過程に取り入れ、「確かな学力」を身につけ、主体的に学ぶ児童を育成する。<br>○　研究の見通し<br>　①　研究体制の工夫<br>　・　全職員が研究主題の共通理解を図る。各部会が研究仮説を立て、低･中･高学年部会が具体的な研究の視点を設定し、授業実践による研究を行う。<br>　②　指導方法の改善と工夫<br>　・　個に応じたきめ細かな学習指導を行うため、少人数指導やＴＴ指導を有効に活用する。<br>　・　児童の学習状況を捉え、理解や習熟の程度に応じた指導や教材の開発を進める。(指導と評価の一体化)<br>　・　自己学習力の向上を重視した取組により、自ら課題を見つけ解決しようとする児童の育成を図る。<br>　・　授業での検証を通して、教師の児童観･指導観の見直しや指導技術の向上に努める。 |

| | |
|---|---|
| | ○　研究の内容・方法<br>①　内　容<br>・　個に応じた指導を図るための指導体制と指導方法<br>・　指導内容､指導の場の研究<br>・　教材教具の開発<br>・　評価（児童の自己評価・指導と評価の一体化など）の研究等<br><br>②　方　法<br>・　研究授業を毎月１回実施し、その都度、４部会(評価・授業・教材・基礎基本)に分かれて授業を通して得られた成果と課題について話し合いを重ねた｡まとめられた成果や課題を次の研究授業で検証するという体制を継続してきた。また、話し合われた内容は､研究新聞にまとめて掲載し､全職員が継続的に研究実践できるように取り組んできた。 |

| | |
|---|---|
| 平成16年度 | ○　テーマ<br>一人ひとりの実態を捉え、補充的・発展的学習を指導過程に取り入れ、「確かな学力」を身につけ、主体的に学ぶ児童を育成する。<br><br>○　研究の見通し<br>前年度の研究の成果と課題をふまえ、研究内容･方法等に改善を加え、意欲を高める学習指導のあり方を追究する。<br><br>○　研究の内容・方法<br>①　内　容<br>・　個に応じた指導を図るための指導体制・指導方法(全学年での習熟度指導)<br>・　学力実態調査・児童アンケート等のデータ分析による指導改善<br>・　評価（児童の自己評価・指導と評価の一体化等）の研究<br><br>②　方　法<br>・　４部会（評価・授業・教材・基礎基本）に分かれて、定期的に各部会を開催し、研究推進のための提案<br>・　部会等の提案を受けて､月１回の検証授業の実施<br>・　研究新聞の発行 |

（３）研究推進体制




※各部会長が推進委員を兼ねる。各部会には全職員が関わる。

## Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び課題

### １　研究の成果

（１）　研究体制の確立

本年度は年間を通じて、少人数指導を１、５、６年で、ＴＴ指導を２年で実施している。また、５年、６年では、学級枠によらない習熟度別学習を取り入れたり、低学年では専科教員等が単元によって、ＴＴ指導や少人数授業を行った。

（２）　授業実践による視点の設定

①　低学年では、「楽しい学び」という視点を大切にし、少人数指導の中で有意義に展開できる算数的活動や繰り返し学習の在り方を考えた。興味・関心を持続したり習熟を強化するため、ゲーム的要素やリズム的要素を有効に取り入れた指導法の工夫を行った。

②　中学年では、「一人ひとりの理解の程度に応じた学び」という視点を大切にし、一斉授業の中で、「確実な定着を図るコース」、「理解を深めるコース」、「発展的に考えるコース」を単元の指導過程に位置づけ、毎時間の終末段階でコース別のプリント学習を行った。

自分の力に見合ったコースを選択することで、わかる喜び、できる喜びを感じより難しいものへ挑戦しようと意欲的に取り組もうとする児童が確実に増えてきている。

③　高学年では少人数授業を実施し、「一人ひとりが自分の考えを持ち、表現し合える学び」に視点をあてた。単元導入に際して、前学年までに学習した内容を振り返る指導を行い児童の理解の程度や課題を把握し、指導過程に生かす単元構成を行った。そして、単元の途中や終末に診断テストを実施し、その結果やコース別学習の内容を児童に知らせて自分に合ったコースを自己選択できるようにした。

また、自己評価表を活用することで、児童が自らの学習状況を振り返り、さらに、次の課題を見つける力を育てるようにした。

（３）「算数教室、朝のはげみ学習」の実施

週時程の中に、「隅田っ子算数教室」を位置づけ、学校独自に作成した計算プリントによる学習を取り入れた。３年以上、学年の枠を外して校長・教頭をはじめ、全職員が指導にあたるようにした。

算数教室や朝のはげみ学習の活用によって、個別指導の必要な児童には補充的な学習が行え、習熟の十分な児童には発展的な学習に取り組ませることができ、基礎的・基本的な学習が徐々に身についてきている。

### ２　今後の課題

（１）　本年度の研究によって、児童一人ひとりに確かな学力を身につけさせるため、習熟度別指導を取り入れることにより、効果的な学習指導ができることが確かめられた。

習熟度に応じた教材の開発や指導過程の研究等、取組に改善すべきことについてはさらに研究を深めたい。

（２）　高学年で、前学年までの学習内容の復習を行って単元導入を図った展開を一部で取り入れたが、他学年にも広げた取組をしたいと考えている。それには、指導時数の関係から指導計画を練り直す必要がある。

（３）　コースに分かれての学習が、児童にとって優越感や劣等感を感じさせる指導にならないよう配慮をが必要であると考えている。また、保護者にも理解されるように努めていきたいと考えている。

（４）　中学校との連携は、今まで以上に緊密にしていかなければと考えている。

## Ⅳ　学力把握のための学校としての取り組み

（１）　漢字確かめテスト
目的　当該学年までの漢字を「読む・書く」ことができなければ、どの教科の学習においても困るため、漢字練習をさせて定着率を高める
内容　全学年５０問の確かめテスト（３学年分を実施）
時期　２月中旬

（２）「数と計算」の領域における確かめプリント
目的　つまずき調査と今後の指導に生かすため
内容　１年～６年の基礎的な内容
時期　２月下旬

（３）　全校学力診断テスト作成と実施

## Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

（１）　毎年３月に１年間の教育研究のまとめ（各学年のまとめ・４部会の実践など）を作成

（２）　研究成果普及のためのホームページの作成を予定

（３）　フロンティアティチャーの活動実績
７月　他郡市の小学校の職員研修で実践発表
８月　橋本市２１世紀教育フォーラムでの実践発表
１０月　和歌山県教育研修センターで評価についての実践発表

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　☑１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑ T.Tによる指導　□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無